

●書評

「内なる世界—インドと日本」

カラン・シン／池田大作 著

山折哲雄

面白い対談集である。

話の内容は知的領域にわたるトピックから現代文明の諸問題へ、学問の話題から人生の考察へと展開し、読んでいて飽きない。

何故面白いのかといえば、話の流れのなかにインドと日本の対論、インドの宗教思想と日本の宗教思想の対決がまことに率直な形でくりひろげられているからであるにちがいない。

対談者の一方、カラン・シン博士は、一九三二年の生れ。北インドはカシミールの藩主の子として誕生し、三十六歳で下院議員に当選、インド史上最年少の閣僚として入閣した。その後、観光・民間航空相、健康・家族相、教育文化相を歴任し、ジャンム・カシミール大学とペナレス・ヒンドゥー大学の総長になった。インド文化関係評議会の副会長や世界ヒンディー語財団の会長をつと

め、日本にも数回にわたって訪れている。

これに対しても一方の対談者は、創価学会の池田大作名誉会長。創価大学、東洋哲学研究所、公明党等を創立し、一九八三年には国連平和賞を受賞している。モスクワ大学・ソフィア大学の名誉博士、北京大学・復旦大学・サンマルコス大学の名誉教授になっている。

文字通りインド政界の俊秀と、日本宗教界の重鎮の出会いといった趣きなのであるが、それが宗教を語り、文明を論ずる過程で、広大な知的世界をボーリングしていく。

普通この種の対談は、それぞれの「巨頭」の、かならずしも中味をともしなない立場の型通りの宣言に終始し、紳士的問答によるたんなる平行移動の域を出ないのが通り相場であるのだが、本書のコンテキストはそうはなっていない。それはおそらく、二人の対談者が現実世

世界の渦流に身をさらしつつ、新たなグローバルイズム（世界主義）の構築にむけて並々ならぬ情熱をもって事に臨んでいるからなのである。本書の面白さもまた、そこに由来するといっているのだからである。

何ごとを語るにせよ、対談という企てが成功するか否かは、そこに同質的な意見が共鳴することによるのではなく、ひとえに色鮮やかな差異の輪郭がそこに浮上してくることによってであることは、いまさらいうまでもない。

その差異性は対論者たちの人間としての資質にかかわると同時に、文化や民族の個性に深く根ざし、世界観や人生観の質の違いにまでかわっているであろう。ここではとりあえず、その対談において差異性を顕著に示す若干のトピックをとりあげて、問題の所在を指摘してみることから始めようと思う。

第一の問題は、「ギリシア」と「西欧」に対する両者の認識や観点のうちに、微妙な差異がみとめられるという点である。それはおそらくインド人と日本人における

文化の位相が基本的に異なっていることを暗に示しているにちがいない。

たとえば池田氏は、ギリシア世界の哲人王とインド世界の仏教僧侶の間に行われた対論『ミリンダ王問経』をとりあげ、インドに対するギリシア文化の衝撃力についてふれている。それに対してシン氏は、インドの文化と歴史に及ぼしたギリシアの影響を過大に評価する傾向に疑義を呈している。同様に、一般にガンダーラ美術といわれる文化遺産に対する見方にしても、両者の間には比重の置き方に微妙な違いが看取される。すなわち仏像の起源についてギリシア文化の波動に注視する池田氏に対して、しかしながらギリシアの精神は神々の内面的な光輝を表現するうえでは欠けるところがあった、というように。

総じていえば、池田氏のまなざしの背後には西欧の知識と方法を受容してきた日本の学問伝統の認識が宿っているのに対して、シン氏の主張の後景にはインド・ナシヨナリズムの強固な信念が横たわっているといってもいい。

ない。

しかしながら、池田氏が仏教を語るとき人生の「苦」に重きを置き、それに対してシン氏がヒンドゥー教を語るときもつばら「歓喜」の要因を強調している点は、やはり両者の観点の相違としてみとめないわけにはいかないのだからである。

しかしそうはいっても、現実のインド世界が、苦の自覚を媒介とする瞑想体験と歓喜の意識を増大させる活動性から成り立っていることはいままでもない。本書のなかで池田氏が同時に指摘しているように、インドの宗教には禁欲と快楽、否定と肯定、静粛と熱狂といった両極端の生活態度が併存している。一方に明朗で、騒々しくて、性を謳歌する生活態度があるかと思えば、他方では深刻に人生を苦ととらえ、これを嫌悪し、一人で静かに瞑想し、苦行によって現実の生から解脱することを願う生活態度があるといっている。

それがおそらく現実のインド人の姿であり、インド宗教の実体だったのである。そしてこのような見方につ

いのである。その視点の落差は、なほどこか日本の近代とインドの近代を分けへだてる亀裂のあとを反映しているであろう。

対論者によって提起されている論点の第二は、仏教とヒンドゥー教の根本思想にかかわる問題である。

池田氏は、仏教の「革新性」として法の下における平等、人間の現実の苦（ドウファ）にあると直視すること、実体主義を否定する縁起の考え、の三つを挙げている。それに応じてシン氏は、ウパニシャッドの尊者たちはすべての存在の基本が歓喜（アーナンダ）にあると考えていたとし、以後ヒンドゥー教が一貫してこの立場をつらぬいてきたことを強調している。すなわち仏教の「苦」の思想に対してヒンドゥー教の「歓喜」の思想を対置し、その相違点をきわ立たせているわけであるが、この対立のテーマが本対談を通じて基調低音のようにせり上ってくるのがきわめて印象的である。むしろ仏教は「苦」の思想のみを重要視しているのではない。同様にヒンドゥー教もまた「歓喜」のみに関心を集中してきたのでも

いてはシン氏にもまた異論のあらうはずがないのである。したがって本当のところをいえば、仏教の「苦」的認識とヒンドゥー教の「歓喜」的認識をただ二元的に別々のものととらえるのは間違っていることになる。そうではなくて、その両者の立場をふまえる総合的な舞台のうえにインドという存在を置き直してみる必要があるのである。

思えばこれまでのわれわれは、ヒンドゥー教は梵我一如の実在論、それに対して仏教は空—無我の超越論、といった二分法的な見方をあまりにも大上段にふりかざしてきたのではないか。そのような偏執の構えによって、インドという珠玉のごとき球体を截断し切断してきたのではなかっただろうか。そのような誤謬をのりこえるための一つの方途を、この対談集はわれわれの前に呈示しているように思うのである。

論点の第三は、ヒンドゥー教の諸經典と法華經の比較という問題である。さすが池田氏は、創価学会の代表者にふさわしく、対談の随所に法華經の思想的課題をもち

だして、果敢にシン氏との論争を挑んでいる。たとえば法華經の「諸法実相」論とウパニシャッドの「意識の変化」をめぐる議論との対決などは、その一例である。しかしそれらの議論のなかでとくに興味をひくのは、池田氏が「妙法蓮華經」の「蓮華」のテーマをもちだして論を立てているのに対して、シン氏がヒンドゥー教の伝統において「蓮華」が担ってきた多様な精神的意味について蘊蓄を傾けているくだりである。すなわち蓮華は、まず密教的な次元では個人の意識が開花するプロセスにたとえられ、ヨーガでは瞑想によって深まるチャクラ（生命中枢）のイメージに比較されている。

またヒンドゥー教神話ではブラフマーはヴィシュヌの「へそ」から生える蓮華のうえに坐して宇宙を創造し、慈悲と繁栄の偉大な女神マハラクシュミーも蓮華のうえに立ち、左右の手に蓮華をもっているではないか。こうして蓮華はヒンドゥー教のみならず、仏教やジャイナ教の宗教文学や美術のなかにも浸透し、仏教の伝播とともにアジアの各地、そして日本にまでその優美で華麗な

イメージを連んだのであった。その文化の精華としての「蓮華」をいわば世界化するうえで、法華經のはたした役割ははかりしることができない。両者の対談はこの蓮華の象徴的な意味について語りはじめるとき、本書全体の基調トーンからはいささかはずれて、不思議な共鳴音をひびかせているのである。

この外、仏教が成立した社会的基盤についての議論も逸することができないだろう。たとえばシン氏は、ソクラテスの対話がアテネという都市の雑踏のなかで行われたのに対し、ウパニシャッドの教えはかならず静かな森のなかで説かれたことに言及している。これに対し池田氏は別の個所で、初期の仏教々団は都市を中心に支配階級の知識人を主な支援者として成立したが、そのため民衆の間に土着することに失敗したと述べている。このような観点に立つとき、ギリシア哲学とウパニシャッド哲学、そして仏教思想を多角的に比較していく道がさらにひらけてくるにちがいない。

仏教思想の評価という点でいえば、インドにおける後

期密教すなわちタントラ仏教に対して両対談者が対立した意見をのべているところが面白い。一方の池田氏はこの密教に対しては否定的で、神秘的な呪術の力を頼りにする密教のいき方は原始的なシャーマニズムへの逆行を意味するという。さらに密教の一部には、人間の本能的欲望をそのまま肯定して女性崇拜や魔神崇拜を行い、性的快楽のなかに悟りの境地があるとするものがみられるが、これは釈尊の教えに反すると主張している。このような見解はわが国の仏教界においても一般的にみられるものであるが、これに対してシン氏は反論している。すなわち人間の性格は一般に考えられているよりも、はるかに複雑で神秘的なものであり、その内奥の欲求を満足させるには知的な命題や道徳的な戒律だけではかならずしも十分ではないと述べている。

またそれにつづけて、タントラ派は性的エネルギーを精神的悟達に転換することができるという仮説から出発しているのであり、そのような密教が形成されたのは都市ではなくて、主として生態も気象風土も異なる、吹き

さらしのヒマラヤのような高山であったことを念頭に置くべきだといっているのは刺激的である。池田氏が人間存在の理念的な側面に関心を示しているのに対して、シン氏はむしろ人間の意識の変容という側面に注意深い視線を注いでいる。それはまた、仏教というものに対する二つの異なったアプローチを示しているといえるであろう。

一般にインドの知識人は、仏教の仏陀がヒンドゥー教の主神ヴィシュヌの化身であるとする伝承をとりあげて、ヒンドゥー教の優位性を主張する。したがってそういう人々の多くは、仏教が普遍宗教であるのに対してヒンドゥー教が民族宗教であるとする、例の西欧流の宗教学的常識を認めようとはしない。このようなヒンドゥー教的視点は、われわれの認識の虚をつくものであるが、本書におけるシン氏の見方にもそれがあつて、そういう観点からの氏の仏教論には教えられるところが多い。たとえば「仏界」とは万物に遍在するブラフマンの光のことであり、また「仏性」とは各個人に内在する不滅のアー

トマンのことではないか、と氏はいつているが味わうべき言葉であろう。

つまり「仏性」とは、ヒンドゥー教では「ブラフマンの人格化された側面」なのだという。このブラフマンは、この世に顕現する万物の背後にある「偉大な存在」であるが、精神的な「ダルマ（法）」を弘めるために、ときどき人間の姿をとって降臨する。その人間の姿が、ヒンドゥー教ではカルキ権化となり、仏教ではマイトレーヤ（弥勒）仏となるのだという。あらためて、仏教の全体系がインドの宗教風土という広大な土壌のなかから生みだされた宗教思想であつたということを思い知らされるのである。

両者の対論は、最後に「東洋の英知と人類の未来」というテーマをめぐって展開されていく。そのなかで池田氏は法華經に説かれる生命観をとりあげ、生死輪廻の世界と久遠の仏という考え方がどのようにリンクし、またどのような形で宗教思想の世界を掘り下げているのか、そのプロセスについて慎重な考察を加えている。仏教の

根本態度を特徴づける「煩惱即菩提」という考え方もそこから描きだされ、論じられているのであるが、それに対してシン氏がスリー・オーロピンドの思想を提示して応じているのが印象的である。

オーロピンドはインドの哲学者でヨーガ行者でもあるが、彼によると、人間は動物の意識と神の意識の中間点に立つ一つの生物であり、その人間が精神的発展をとげるかどうかは、知性のレベルから一段高い超知性のレベルへ飛躍的進化ができるかどうかにかかっている。そしてその飛躍によつてはじめて煩惱の克服が真に実現されるのだといっている。ここにもまた、仏教とヒンドゥー教の精神的提携の可能性が語られているといつていいであろう。

以上、本対談集の内容を概観し、そこに展開されている若干の論点をすくいあげて、コメントを加えてみた。問題は多岐にわたっており、知的にもかなり高度な情報交換されている。話題も豊富であり、読む者の関心を惹きつけるが、しかし何よりもそこから教えられるのは、

仏教とヒンドゥー教のそれぞれの思想体系の特徴がきめ細かく検討されている点ではないだろうか。そのうえ、仏教とヒンドゥー教を等距離に眺めようとする視点がどこかに仮設されていて、それが本書の視野を広げるのに役立っている。インドに対する眼差しと日本に対する眼差しが、そのことによつて安定したバランスを保ち、内なるアジア世界を静かに照らしだすことに貢献しているのである。

（やまおりてつお・国立歴史民俗博物館教授）

